

東北地方太平洋沖地震の現地への第3陣の支援の報告

目的：現地から要請のあった支援物資を運ぶこと、人的支援要請の把握とその方法について情報収集する。日精看としての短期、中長期、長期的な支援の方法を検討する情報を収集する

日時：平成23年4月4日（月）

同行者：矢野眞二（医療法人社団青木末次郎記念会本部事務局顧問）
塩田宗光（ダイケア・スワンベーカーリー）
大塚恒子（協会副会長）

目的と行程：

- 4/4 12:30 レンタカーワンボックスカー1台と乗用車に物資を搬入
13:45 出発 東方自動車道を走り、3回休憩 安達太良でガソリン給油
国見のドライブインで食事
20:00 一関インターに到着
21:00 岩手県一関巖美町祭時で宿泊
- 4/5 8:00 出発
10:20 医療法人くさの実会光ヶ丘保養園（宮城県気仙沼市浪板）
・お米、患者さんの靴下、ズボン、ミカンなどを渡す
・園長先生にご挨拶、看護主任の佐藤文子（宮城県支部副支部長）さん
打ち合わせ
11:30 出発 ガソリン給油
15:55 福島県立矢吹病院（福島県西白河郡矢吹町八幡）
・トイレットペーパー、マスク、タオルケット、タオルなどを渡す
・渡辺看護部長、館下師長（?）、たきた看護師と今後の物資の搬入や原
発の20・30キロ圏内の情報と支援について話し合う
16:30 出発 ガソリン給油
19:30 到着

打ち合わせ内容から今後の支援について

1. 矢吹病院を拠点とし、必要としているところに物資は配布する役割を担っていた
たく
 - ・支部に協会に送られた物資を矢吹病院に搬送
 - ・原発の地域は手つかずでライフラインも回復せず、何が足りないか不明であるが、
矢吹病院が他と連携していく
 - ・人的支援も大学と連携して行ってほしい
 - ・福島県はガソリンも物資も十分に供給されてきている。病院も今は不自由がないが、
避難所などに配布したい

- ・原発の被爆地域は協会の人たちは入らないように。自分たちは地理が分かっている
- ・物資を届ける手段を考える
- ・職員の家は「ぼろぼろです」とのこと

***福島支部は物資には問題がないが、協会にいただいた物資は避難所の方々へ配布のため、矢吹病院を拠点に搬送する**

***原発区域への人的支援の行う**

***矢吹病院の職員も被災者なので依頼と丁寧な支援**

2. 医療法人くさの実会光ヶ丘保養園は自分たちの力でやっていきたい

- ・津波が襲った 1 階はむき出しだったが、自衛隊が入り 2 階に患者さんを移動してもらえる環境ができたので、自分たちの力でやっていきたい。患者の命を救ったのは自分たちなので。
- ・食事はまきでご飯を炊き、水道もないので袋に入った水をチューブで出し炊事をされていた
- ・職員は病院復興への意欲からか表情は明るかった
- ・日精協から 6 人 2 カ月応援が 4 月 5 日から来られる。医師が不足しているの。
- ・訪問者への対応が大変そうだった
- ・ヘドロの臭いと汚臭が充満し、ほこりぼく、暖かくなるとさまざまな感染症が気になった
- ・長期戦になるので、職員が疲れてこられたらいつでも SOS を出して下さいと伝える
- ・職員の家はライフラインが整っておらず、出勤すると車を流されたものが多く、車が少ないので、2 日間病院に止まって交代で使っている
- ・明るく話されるが、「患者さんに避難をしてもらおうのがやっとなので、どうしてもっと運び出さなかったのか悔やまれる」と言われていた

***自分たちでという思いを今は尊重すべきであるが、心身の疲れがすぐに出る感じがして、人的支援のタイミングを検討する**

「感想」

- ・被害の様は報道で見た通りで絶句だったが、臭いは訪問して分かった。トンネルを超えると、全く被害の無い町があり、普通に暮らされていることの違和感や、不公平感があった。
- ・宿泊時、陸中高田の方々が非難されていた。津波に流されたが助かったとお風呂に入り食事はされていたが、お話しして下さることが淡々としており、表情がないことが気になった。若い方々は、旅館の掃除を手伝っているとのこと。旅館には米や衣類がたくさん送られていた。衣服類は手をつけないのか山積みだった。ここも 1 カ月の約束とか。